令和五年度　奈良県教育長賞

税は絵の具

西大和学園高等学校　一年　平賀　茜音

「あっ危ない！」そう思ったが時はすでに遅し。私は思いっきり机の角にお尻をぶつけた後、床に叩きつけられた。あまりの痛さにしばらく声が出なかったが、だんだんと感覚が戻り、「ママー」と助けを呼ぶ自分の声はとても情けないものだった。

小学三年生の秋の夜、私は机の上でふざけて踊っていた。華麗なターンをキめるつもりだったのだが、ふっと足が滑り机から落っこちてしまったのだ。救急車が来ると、救急隊員の方が数名がかりで私を担架を使って車内へ運び込み、血圧や心拍数を測りはじめた。耐え難い痛みに襲われていた上、自力で立つことができなかったのは事実だが、重症患者と同等のここまで本格的な治療が私にも行われるとは思っておらず、とても申し訳ない気持ちになった。

日本では救急車は行政サービスのひとつとされ、その費用は税金で賄われるため、原則無料で利用できる。しかし、救急車が一回出動するのにはおよそ四万五千円かかるらしい。おぉ、想像の何倍も高い。私の失態によって国民のこれだけの血税が使われたのだと思うと胸が痛い。だが、もしも救急車が有料だったら私はあの日痛みに耐えながら辛い夜を過ごさねばならなかっただろうし、本当に重症で本人が呼べなくても、第三者が気軽に通報できず救える命が救えなかった、なんてことになるかもしれない。救急車は軽はずみな気持ちで利用していいものではないけれど、やはり税金によって、どんな時でもだれでも呼べる存在であってほしいと思った。

私は今年の夏、一週間ほどアメリカでホームステイをした。引率の先生からは何度も自分の体調管理をまず自分でする、ということをおっしゃっていた。なるほど、アメリカでは医療費の負担額が多い上、救急車を利用すると約三百ドルが請求されるらしい。これではよほどの状態でない限り救急車を呼ぶことも病院へ行くこともためらわれる。しかし、実は救急車を使える国は世界の中でもほんのわずかな国だけらしい。それを知って感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

メディアではよく日本の税金の使い方について議論が催される。そしてそれを受けた私たちは税に対してついつい厳しい目を向けてしまう。しかし、私たちは本当に税の使い道を知っているのだろうか。税によって快適な暮らしが実現しているからこそ、日常のちょっとした、税によって支えられている様々なものに気づかずに過してはいないだろうか。

私は救急車が税によって無料で使えるありがたみを、救急車が有料のアメリカに行くことで初めて感じた。日々の生活を支える目に見えないもの、例えば税を発見して感謝することは、ひとつ自分の身の回りを彩り豊かにするように思う。